

『女は女である』 上映後のコメント

ひびの まこと

ウェブ <http://barairo.net/>
メール hip@barairo.net

関西クィア映画祭実行委員のひびの まことです。

このコメントのために、日本語字幕の確認をしながら、もう一度この映画を見ました。

この後述べるように、気になる点がいくつもあるにもかかわらず、わたし自身がこの映画を見て、やはり心を動かされてしまうのはなぜだろうか？と自問しました。

それはおそらく、この映画を通じて、監督を始めとしてこの映画作りに関わった多くの人たち、その多くは女性だということですが、彼女たちが、「トランス女性は女性である」と本当に思い、香港社会に対してそう主張するためにこの映画をわざわざ作ってくれている、という事実に対して、わたしは心を動かされているのではないか、と思いました。

トランス女性への差別は、最近話題になるネット上にあるものではありません。そういえばこの映画でも、ネット上のひどい発言は全く出てきませんでした。トランス女性への差別は、毎日の日常生活の中で、今でも、今日でも、実に繰り返し実践されているからこそ、問題なのです。多くの人にとってはどうということのない毎日の何気ない生活、それ自体が、トランス差別に満ちています。

だからこそ、ハッキリとトランス女性の側に立とうとする映像表現を見ると、心が動かされてしまうのです。

そして、心を動かされるほどの力を持った映画だからこそ、黙って見過ごすことはできない、と思う点があります。

まず一つ目は、主人公達の2人のトランス女性が、2人とも、典型的なトランス女性だ、という点です。完全に女性としてパスしていたり、性同一性障害の診断を得たりするような、つまりシスジェンダー社会の「男らしさ」「女らしさ」の世界を揺るがすことのない存在としてのトランスジェンダーしか、描かれていません。私たちの周りには、この映画に描かれている「典型的な」トランス女性とは異なるあり方の、典型的ではないトランスジェンダーが、いくらでも居ます。その中の一部は例えば「Xジェンダー」「ノンバイナリー」「クィア」などを名乗ったりもしますし、そう名乗らなくても、性同一性障害の診断基準にはあてはまらない/特にあてはまりたいとも思っていないトランスジェンダーも、沢山いるのです。

(会場後方には、トランス女性、MTF系ではありませんが、FTM系の典型的ではないトランスジェンダーのあり方を示す写真も展示していますので、ぜひそちらもごらん下さい。)

映画ではせつかく2世代の、世代の離れたトランス女性を描いているのですから、例えば若い方を「典型的でない」「性同一性障害ではない」トランスジェンダーとして描くこともできたはずですが、まずその点が残念でした。

以前うちの実行委員をしていたりようちゃんのことを借りるなら、この映画

を見て、「この映画の中には、私がないんですよ」と感じるトランス当事者がいる、ということが、この映画を見る時には忘れてはならない点なのです。

アジアのトランス映画も多くない中で、一つの作品に全てを求めるのは酷すぎる、一つの作品で全ての存在を描くことはできないよ。もしかしてそう思われたかもしれません。

しかし実は逆に、その貴重な1作品だからこそ、そこで「典型的なトランスジェンダー像」ばかりが描かれてしまうと、「トランスジェンダーとはこういう人たちだ」という誤解を世間に広めることにもなってしまうのです。しかもこの映画の冒頭は「トランス女性の語られざる物語」です。私にとって、この物語は、散々語り尽くされてしまっている、いつもの、典型的は、お話でした。ただ一方で、この映画のような生き方をしている人たちも大勢います。

悩ましいです。でもその「悩ましさ」を引き受けることが、言い換えると、表現の意図だけではなく結果にも責任を負おうとすることが、表現の世界に身を置く者には求められると思います。

だからこそこうやって、上映後に補足のコメントをしなくてはいけない、と私は感じました。

映画を上映する主催者としての映画祭実行委員会としては、ぜひ映画祭で沢山のタイプのトランス映画を見てほしいと思って、今年も沢山の、いろんなタイプの、典型的ではないトランスジェンダーも登場する映画を頑張って集めています。ですのでぜひ、他の作品も見ていってほしい、と強く思います。

この映画については、他にも、学校で制服を着たくないから、体操服で登校することになる、という描写がありました。現実によくある話なのでそれはそれでいいのですが、しかしではどうして、「制服が男女別になっている事」をやめないのでしょうか。もしくは、そもそも制服を廃止したら、この話は問題ではなくなるはずなのに、そんな話には全く行きません。

実は、シスジェンダー中心の社会のあり方、既存の社会の制度やルールそのものを変更してしまえば、トランスジェンダーが生きやすくなるような事例はたくさんあります。でも、既存の制度や社会の仕組みを変えるのではなく、それを維持したまま、あくまで「例外的な存在」としてトランスジェンダーを扱い、「特別な配慮をしてあげる」という扱いになることの方が多いのです。トランスジェンダーを差別する仕組みと社会を温存して置いて、その上で「トランスジェンダーの人たちのために」何ができるだろうかと「良心的に」振る舞おうというのは、私には偽善に見えます。そう、ほとんどの「トランスアライ」は、実は単なる偽善なのではないですか？

と、そろそろ話が長くなってきました。

私からのコメントはこれくらいにしておきたいと思います。

もし会場の皆さまからのコメントがあれば、限られた時間ですが、出して頂ければと思います。